

一、消費者物価の動き

代表的な物価統計には卸売物価指数（日本銀行）、消費者物価指数（総理府統計局）、輸出入物価指数（日本銀行）の三つがあるが、私たちの暮らし向きを計るモノサシは、何といつても消費者物価指数（CPI）であろう。四百二十八品目の小売価格のほか、サ―ビス料金や公共料金も加えて指数をはじき出しており、その動きは所得、消費貯蓄各面に深いかかわり合いを持つものとして、近年特に注目されている。

最近の消費者物価の動向

—日本銀行熊本支店—

近年における消費者物価の動きを簡単に振り返ってみると、昭和四十年代前半には年率四、六〇程度の上昇に止まっていたのが、四十八年（一九・一〇）、四十九年（二一・九〇）には、オイル・ショックを主因に卸売物価が急騰、つれてこれが消費者物価にもハネ返りいわゆる狂乱物価に苦しんだ記憶は今なお生々しいところである。幸い五十年に入ってから概ね一桁の上昇に収まっており、五十一年も七月までのところ九・五〇の上昇となっている。熊本の物価もその枠外ではなかったわ

けであるが、因みに熊本市の消費者物価の動きを東京都（二十三区）と比較してみよう。四十五〜五十年の五年間の上昇率は東京七一・一〇、熊本七一・四〇と同程度となっている。ただ、オイル・ショック後の上昇率（五〇/四八年）についてみると、東京が三七・四〇に対して熊本が三九・〇〇となっており、小売価格の水準はともかく、値上がり方としては熊本のほうがやや大きい。これを項目別にみると、住居費（熊本三七・七〇、東京三四・八〇）、被服費（熊本三一・二〇、東京二八・六〇）の値上がりが目

表1 熊本市と東京都の消費者物価の項目別上昇率および小売価格の比較<％>

	総合		食料		住居		光熱		被服		雑費	
	熊本	東京	熊本	東京	熊本	東京	熊本	東京	熊本	東京	熊本	東京
45~50年	71.4	71.1	76.4	77.9	61.1	60.9	52.5	54.7	77.4	77.6	69.7	65.8
48~50年	39.0	37.4	43.9	41.8	37.7	34.8	38.1	36.4	31.2	28.6	36.4	36.9

	カレ―ラ		家賃(民)		灯油		せんたく		代ワ		理髪料		高校授業料	
	熊本	東京	3.3㎡	3.3㎡	18ℓ	18ℓ	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚	1枚
熊本	270	300	1,390	3,720	725	746	110	146	1,430	1,620	11,800	14,900		

51年5月時点

二、物価上昇の背景

ところで、最近の物価上昇はいかなる要因によってもたらされたものかを考えてみよう。日本銀行調査局の試算によると、別表のとおり、(1)卸売物価上昇のハネ返り、(2)個人消費支出の水準、(3)公共料金の引上げ(4)賃上げ、(5)季節商品の引上げの順に寄与しているものとみられる。

表2 消費者物価上昇に対する要因別寄与度<％>

	卸売物価	賃金コスト	個人消費支出	公共料金	季節商品
48年	43.9	11.6	26.4	7.4	10.7
49	47.1	15.2	16.8	10.2	10.7
50	30.4	13.6	26.3	22.9	6.8

こうしてみると、卸売物価の影響がかなり大きいほか、このところ公共料金の引上げが大きくなっていることが注目される。

三、今後の見通し

今までのところ消費者物価の動きは落ちてきているが、ただ先行きについては、消費者物価に影響を与える卸売物価が、昨年七月以降一四か月も連騰し、八月には前年比六・七〇の上昇を示しており、今後消費者物価にどのくらいのタイムラ

グを置いてどの程度の影響を与えるかが注目される。もっとも、最近の上昇は生産財が中心となっているため、一般的に消費者物価へのハネ返りまでの期間は長く、波及過程で上昇分がある程度吸収されるのではないかと期待がもたれている。また、いわゆる新価格体系への移行が一巡すれば上昇率も鈍化しようとして、過度な心配はあたらないとの見方もある。

ただ企業は長期不況による操業度低下、四十九年大幅べアなどによる固定費の増大、昨今の原料コスト上昇などから収益の確保に悩んでいるだけに製品価格も引上げたいとの気構えが強く、これが一斉に火を吹いた場合には心配がある。

一方公共料金については、電力料金、消費者米価に続いて、先行き国鉄運賃、電信・電話料、ガス料金と値上げが相次ぐ見通しでもあるので、その程度はともあれ、消費者物価への影響は否めない。したがって、今後の物価見通しについては予断を許さないものがある。

老人から子供へ昔を繋ぐ

すべての老人に、生きがいのある明るい豊かな老後のくらしが保たれるようにすることは、高齢化社会への移行を控えた現在、老人自身はもちろん、若い世代の人々、家庭、地域社会、県民の皆さんともどもが共通の理解と認識のもとに取り組まなければならない課題です。

本県における老人人口も年々増加を続け、六十五歳以上の人口は、昭和五十年には十八万一千人となり、昭和四十年に對し二七パーセントの増加をみせ、県人口に占める割合も八・一パーセントから一〇・六パーセントと増加、全国五番目の高率県となっています。

今後の福祉対策は、従来の、単に老人を弱者として保護する立場にとどまらず、今日の社会を支える大きなエネルギーとしてとらえることが必要です。即ち老人が、その豊富な経験と知識を社会のために活用し、そこに生きがいを覚え、充実した老後がおくれるような福祉対策を推進しなければなりません。

「生きがい」それは本来一人一人が日常の生活の中から生み出すべきものです。が、地域の中で老人同志が仲間づくりを

行ない、自らの生きがいを高めるため自主的に活動しているのが老人クラブです。

最近特に若い世代との交流を密にし、世代間の理解と連帯を深めるための活動が盛んです。ここでは、それらの活動事例を県老人クラブ連合会から紹介していただきます。



老人クラブ 活動推進員

丸岡憲一

老人クラブ活動の実践項目の大きな柱として地域との交流活動が挙げられているが、世代間の断層をなくし若いも若きも一体となって地域福祉を推進することが老人にとってこのうえない生きがいであるとされている。ともすれば見失なわれがちな地域の古き伝統、民俗、行事などについて、老人と子供の心のふれあいによる愛情豊かな伝承指導こそふるさつづくりに呼応したものと見えよう。県下老人クラブでは老人から子供へ引継がれる形面上、形面下のもの両面で活動が

なされているが、ここに一事例を紹介して参考に供したい。

老人の一日小学生

天草郡大野町上地区老人クラブでは小学校の授業参観を実施し、併せて子供たちとの交歓会により老人と子供との交流を深めている。

現在の大矢野老人クラブ連合会長吉田博氏が十数年前公民館長時代に七十歳以上の老人で若松会を組織し毎月十五日に集会をもっていた。

その活動の中で

- 1、小学校の授業参観
- 2、若松会員の二老婦人がゾーキンを作り小学校に寄贈した。このことが小学校全児童から大いに喜ばれ地域の話題として広がり、新聞報道として取りあげられ二老婦人の顔写真入りで一般に公開されるに至った。二老婦人の喜びは言うまでもない。

この若松会が其後老人クラブとして名実ともに発展解消することになったが、このことが老人クラブ活動として新しく誕生した小学校授業参観のはじまりである。

上地区老人クラブとしては、今年が二回目の授業参観であるという。八十名のクラブ員が上小学校を訪問し、各授業中における机間巡視の老人、孫の鉛筆を削ってやる老人、児童の遊戯を喜ぶ老人、座談会で指導性を發揮する老人、給食を

- (1)長生きしてください。(2)希望をもってほしい。(3)昔の小学校母校の校歌、民話、俚謡は大変面白く、ためになった。(4)この交換会を何回でも開いてほしい。(5)自分も老人になることを考え、たのしく過ごす方法について考えさせられた。(6)ゾーキンを寄贈してもらって心から感謝している。(7)いつも、あいさつすることにとめます……など。

このこと以来子供の礼儀が正しくなり、交通指導その他教育指導にも大いに寄与したという。吉田会長は学校側の理解と協力を深く感謝しているが相対さえて明るい町づくりの一環を担っているといえよう。

老人と子供の交流について老人の役割が強く要請されているなかでも、(1)ふるさとの民俗、行事、工芸などの伝承。(2)手づくりの玩具等製作実技の指導。(3)軽スポーツの合同実施。(4)老人施設の子供への開放。(5)老人クラブと子供会による花づくり運動。など多様な内容をかかえている。

当クラブではこの交換会で子供の心境を洞察しながら老人の役割を肝に銘じて子供との繋りを深める実践活動を押し進めたいという会員の顔は明るい。